

もりたなるお

抵抗の器

小説・山田顕義

抵抗の器

小説・山田顯義

ていこう うつわ
抵抗の器 小説・山田顕義

一九八七年九月三十日 第一刷
一九八七年十一月十五日 第二刷

定価 一二〇〇円

著 者 もりたなるお

発行者 西 永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷 共同印刷
製本 矢嶋製本

万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

©Naruo Morita 1987

Printed in Japan

ISBN4-16-309940-9

目次

第一章	血税一揆	5
第二章	徴兵論争	63
第三章	維新の果実	122
第四章	錦の店開き	180
第五章	西郷星	206
	あとがき	250

装帧
竹内和重

抵^{てい}

抗^{こう}

の

器^{うつお}

小説・

山田
顕義

第一章 血税一揆

一

横浜鐵道館を發車した汽車が、六郷川の鉄橋を渡る。

轟然とした響きが、山田顯義の五体をゆさぶり、氣ぜわしさを掻き立てた。

一年八カ月にわたった旅は、長いようでもあり、短いようでもある。

見聞した西欧先進国の制度や文物は、多くの歳月をかけても、研究しつくせない気がする。

ひるがえって、わが国内の諸制度を見ると、先進諸国に遅れること百年以上で、その整備、改

善は一日たりともおろそかにできないものばかりだった。

いま処理を間違えると、悔いを千載に残すと思われた。

その意味では、兵部行政の職務を離れて旅した一年と八カ月は、いささか長期にすぎたか、と

いう氣がしなくもない。

兵部省理事官陸軍少将山田顯義は、帰朝者がひとしく抱く、安堵と焦慮をないませた感懷を持つて、移りゆく窓外の景色を眺めていた。

さんばら髪が広い額の片側にたれていて、乗りものの震動と息を合わせるように、わずかな動きをくり返している。

童顔の目もとは涼しげだが、よく見ると一点を凝視し、なにごとかを探っているふうである。きりりと締まった口もとは、負けん気の決意を宿している。

「間もなく東京に入りますね」

同乗の原田一道がいった。

兵学大教授の原田は、山田理事官の随行者として長期の視察旅行に同行した。

「品川に着きましたら、お邸に直行されますか」

「山県さんやまがたが迎える馬車くらい差し向けるだろう。それに乗って兵部省にいく」

そう答える顯義に、原田が眉を寄せ、念を押すようにいった。

「閣下。兵部省ではございません」

「そうだったな」

顯義は口を一文字に結ぶと、なにもいわなかったかのように、見えはじめた品川の海に目を移した。

白帆の点在する海上のはるか彼方には、黒煙を上げている軍艦らしい黒い影があった。

明治二年の太政官制改正で設置された兵部省は廃止され、明治五年二月二十八日付で、陸・海軍の二省が設置されている。

顕義が岩倉使節一行と外遊中のことである。

明治四年十一月。右大臣岩倉具視を特命全權大使とする遣外使節団が、出発に際して残留する閣僚と取り交わした約定があった。

大蔵大輔井上馨の斡旋によるもので、そのなかに次のような条項がある。

「内地事務は、大使帰国の上、大いに改正する目的なれば、其間可成丈新規の改正を為すべからず。万一已むを得ずして改正する事あらば、派出の大使に照会をなすべし」(第六款)

「諸官省長官の欠員なるは、別に任ぜず、参議之を分任し、其の規模目的を变革せず」(第八款)
岩倉大使一行が帰朝するまでは、行政機構および行政組織の人事は凍結することである。はじめのうちはその取り決めにしたがっていた留守政府は、行政事務上の必要もあって、機構に手をつけはじめた。機構はいったん手を加えると、連鎖反応を起こす。切れ者の江藤新平が、左院副議長から司法卿に転じた。

江藤はわが身の榮進が約定違反であることに気が咎めたのだろう、得意のロジックを駆使して自己弁護を試みた。

彼は太政官会議に上申をして、従来しきりに用いられていた「改革」ということばを「潤飾」と改めさせた。

潤飾の名目でさまざまな改革を断行しようというわけである。

官制を手直しし、人事をいじること、すべて「職制潤飾」であつて、決して「改革」をするのではない。したがつて、遣外使節と取り交わした約定には抵触しないというこじつけ論理がまかりとおつて、留守政府による改革が次々に進められた。そしてついに、外交政策の決定を行うまでになつたのである。

こうなると、残留政府は遣外使節を無視した「独立政権」ということになる。

留守政府の主な顔ぶれは、太政大臣三条実美を頭に、西郷隆盛、大隈重信、板垣退助、大木喬任、江藤新平、後藤象二郎らの参議。さらに各省の行政実務者には、副島種臣、井上馨、山県有朋、西郷従道、黒田清隆、川村純義、勝安芳といった才器が名を連ねていた。

また一方の遣外使節には、特命全權大使として右大臣岩倉具視。副使として参議木戸孝允、大蔵卿大久保利通、工部大輔伊藤博文、外務少輔山口尚芳が随行した。

岩倉遣外使節の主な目的は、安政年間に結んだ外国との条約期限が切れるので、対等の条約を結びなおすための下調べ、下交渉ということであつた。

さらに諸外国の制度、文物を調査研究し、帰国後にこれを維新政府の行政に反映させるという方針も含まれていた。

そのために各部門の専任研究者が同行した。理事官と称する人々たちである。

メンバーのなかに、陸軍少将山田顕義の名前があつた。現職は兵部大丞。兵部省から出張して、先進諸国の兵制を研究することが、理事官山田顕義の任務であつた。

内には西郷隆盛を頭目とする政権があり、外に岩倉具視、木戸孝允、大久保利通らを擁する政

府が欧米を移動して、留守政府が勝手に制度の改革をした、ということでは、せっかく緒に
ついた統一国家は、ふたたび分裂して内治が乱れるのは目に見えている。

その隙を外国に乘じられたら、維新の大業は元の木阿弥である。

こうした状況を心配した井上馨は、使節一行中の木戸孝允、大久保利通らに対して、帰国を促
す手紙を頻繁に送った。

西欧の文物に魅了されて、予定を一日延ばしにして各地を訪問していた遣外使節首脳は、次第
に遠く離れた日本の政情が気になってきた。

政府が二分しているのもさることながら、うかうかと日を送っていると、西郷隆盛らの留守政
府に、政權を独占されるのではないか……という危惧が一行の重だつた者の胸中をかすめた模様
でもある。

まず副使の大久保利通が、明治六年五月に帰国したのを皮切りに、他の者もそれぞれの巡覽地
を後にして、五月雨式に日本へ帰ってきた。

これらと相前後して、理事官の一団も順次帰国の途についた。山田顕義も明治六年五月三日に、
マルセーユを出航し、アメリカ経由で日本に向かったのである。

遣外使節に同行する形で派遣された理事官には、勅旨として、太政大臣名で命令書が授けられ
ていた。

勅旨 各国の内文明最盛なる国に於て、本省緊要事務、目今実地に行わる景況を觀察し、其方

法を研究講習し、内地に施行すべき目的を立つべし。

当務の顛末、研究習学の功程等時々書録して報告すべし。（命令書の一項）

兵部省理事官として、先進国の兵事および軍制を調査して帰国した山田顕義は、胸中枳然としないものがあつた。

遣外使節一行の帰国を待つて行われるはずの改革が“潤飾”の名を着せられて幅広く実施されている。

顕義の専任である軍制についても大改革が行われていた。

大村益次郎の意図によつて設置され、顕義が引きついだ兵学寮その他の軍事施設を、大阪から東京に移してしまつた。

従来四鎮台（小倉、大阪、東京、石巻）を改めて、小倉は熊本に移し、石巻は仙台に移し、広島と名古屋を新しく加えて六鎮台に拡張した。

兵部省は陸、海軍の二省となつた。

そしてはなはだしいのは、徴兵令の發布である。

兵制の根幹となる制度の改革が、江藤新平の発案による“潤飾”の名を着せられて、堂々とまかり通つてしまつた。実施の責任者は山県有朋である。

兵部省理事官の肩書きで渡航した山田顕義は、出身の役所を失つた格好だつた。

顕義は空巢に入られたような気がしていた。演習に出た帰路で、伏兵に襲われた気分でもある。

窓外に東京湾の海面が、広がったりせばまったりして見えていた。

「とんだ浦島太郎になってしまったな」

頭義は自嘲した。三十歳とは思えない童顔に、沈痛な憂色が走った。

汽車は痩せ犬の遠吠えに似た笛を吹きながら、品川駅に入っていた。

ラッパを吹き太鼓を打ち鳴らす一団がある。小旗を打ち振って、盛んに人の名を呼ぶ歓迎組もいた。

「……………」

頭義の眉に怪訝^{けげん}そうな表情が宿り、やがてこめかみがひくひくと痙攣^{けいれん}した。

原田がせわしげに頭^{こぶ}をめぐらせ、これも神経質な顔つきになっていた。

やがて駅前に集まっていた馬車も人力車も、ことごとく散っていき、駅夫のほかに残っているのは二人だけになってしまった。

「どこか近くに馬を調達できるところはないか」

「承知しました」

領いた原田はほどなく鞍を置いた一頭の真鹿毛^{ましかげ}を引いてもどってきた。

徳川幕府の蕃書調所に勤めた経験がある原田一道は、乗用の馬を都合^{つごう}するつて、を持っていたのだ。

頭義は荷物の処理を原田に託すと、馬を駆って馬場先門近くの兵部省改め陸軍省に乗りつけた。箱館戦争で黒田清隆とともに官軍参謀として善戦した頭義は、東京に凱旋すると間もなく、新

設の兵部省に出仕を命ぜられ、兵部大丞となった。兵部大丞は後年の軍務局長に匹敵する地位である。

この地位に登用したのは、兵部大輔大村益次郎だった。明治二年七月のことである。

木戸孝允の推薦によるのだが、木戸のお声がかりをまつまでもなく、その実力は大村の頭に入っていた。長州内戦における活躍で、高杉晋作が「戦争のやり方は俺より上だ」と評価したことや、鳥羽伏見の戦いで見せた顕義の用兵ぶりを知った上で、箱館攻略の参謀に推したのは、ほかならぬ大村益次郎である。

その大村は、明治二年十一月、刺客に襲われた傷がもとで不帰の客となった。

いま兵部省改め陸軍省を、実質的に取り仕切っている感じの山県有朋が入省したのは、明治三年八月で、顕義より一年遅い。

兵部官僚としては後発の有朋は、顕義の欧米巡覧の留守に、各種の兵制改革をやつてのけた。
“陸軍省”と書き替えた看板の文字も、有朋の筆蹟らしい。右肩上がりのくせ字である。

顕義は、その看板を睨み据え、つかつかと玄関に入つていった。

「どちらにいかれるのか」

入口のテーブルに陣取った若者は、新規採用の吏員であろう。

顕義は答えずに室内を一瞥した。畳敷きの和風だった部屋は板敷きとなり、テーブルと椅子が持ち込まれている。

顔見知りか何人か椅子を立ててお辞儀をした。

「兵部省理事官陸軍少将山田顕義。山県さんに帰朝の挨拶をいたす。案内せい」

顕義を呼び止めた若者は、一瞬ぽかんとし、はっと気づいたようにキョロキョロと周囲を見まわした。

「欧米諸国の軍事を調査してもどった、陸軍少将山田顕義だ。案内をする者は誰もおらんのか」
そのとき一人の男が奥から走ってきた。

「山田閣下。お帰りなさい」

有朋の側近となっている陸軍省第一局第六課長西周にしあまねだった。階級は陸軍大丞である。

「あの……山県閣下は、ただいま外出中です」

「不在だ？」

「は、はい」

顕義はジロリと西の顔を見た。西は視線をそらした。

「不在ならばいたし方ない。明日一番にでも出省いたそう」

「あの……」

「なんだ」

「山県閣下は、こちらから日取りを決めて、お使いを差し上げると申されました」

「わたしに出て来んでもよいといわれるのか」

「……………」

「それともなにか、兵部省理事官には、陸軍省に坐る椅子がないということか」

「それは……その」

「どういふことかはつきりせい」

頭義の見幕に、壁を背にした西は硬直しながら体を横へずらしていった。

「無礼千万だ。お前らの心中はわかつておる。そちらがそういう気なら、こちらにも考えがある。山県さんにそう申しておけ」

縮み上がる西を尻目に、さっと踵^{きびす}を返した。

西は悲愴な顔で唇を噛み、頭義の後姿を見送った。

有朋は不在ではなかった。

参議の西郷隆盛と結んで兵制の大改革を行った有朋は、居留守を使っていたのだ。

頭義とともに対面したら、留守中は改革をしないという約定違反を責められる。

この一件は既成事実として棚上げする方策をとり、山田頭義には、然るべき別の官途を考えると、話を煮つめているところだった。

頭義の身分については、大村益次郎亡きあと、木戸孝允が最も熱心な後援者であるが、その木戸は遣外使節の筆頭副使として、諸制度潤飾(改革)中を留守にし、しかもまだ帰国途上にあった。たとえ帰国しても、参議として大局的状況の把握で頭がいっぱいで、頭義の身辺にまで考えはおよばないものと思われる。

また、同じ長州出身者である伊藤博文や井上馨も、自分のことを考えるのが先だろう、というのが有朋の予想でもあった。